

地域発／現場検証シリーズ

SDGs

スポーツウェアの「クラロン」 福島市

少子高齢化が進み、労働力人口の減少に見舞われている日本。多様な労働力を活用する必要性に直面している。しかも、世界的な動きとして女性労働力の活用が企業の社会的責任として大きく出てきている。ダイバーシティ&インクルージョンと言われる動きである。多様な人材を雇用するだけでなく、彼らが一体として働けるようにする社会的責任が課されている。リスクマネジメントの視点から、多様な労働力の活用は避けて通れない。

このような社会変化に見舞われるはるか以前から、ダイバーシティ&インクルージョンを実践している会社がある。平成27(2015)年に「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞「厚生労働大臣賞」、翌年に経済産業省「新・ダイバーシティ経営企業100選」を受賞した、福島市を拠点とするクラロンである。

多様性雇用の先駆け 従業員の36%が障がい者

多様性雇用の先駆け 従業員の36%が障がい者

中須美子会長



中須美子会長

●97歳の現役女性会長
「会社を始めたころは障がい者、女性も、そして高齢者もいるのが当たり前でした。まったく違和感はなかったのです。それを続けてきただけです」

こう語るのは、代表取締役役員長中須美子氏97歳。今も、毎日会社に通っている。中須美子前社長と、夫婦一緒に現クラロンを創業した人である。

善六社長(当時)は第二次世界大戦中、陸軍大尉としてアジアの激戦地で戦って帰国した。帰国後は縁あって山形で問屋をしていた親戚が福島に肌着工場を始めたので、そこに出身した。ところが、そこが廃業するというので、その会社「錦メリアス」を買取り、工場経営に専念することを決意した。昭和31(1956)年のことだった。その際、障がい者3人を含め、7人の従業員も引き受けた。創業期から、障がい者を雇用していたのである。

創業したとはいえ、肌着は素人。最初の課題は販路開拓であった。自転車で行

社名をクラロンメリアスに変更した。倉敷紡績の糸と鐘淵化学のカネロン糸を使っていたので、両方を組み合わせて「クラロン」としたのである。ところが、この名称はクラレの商標を侵害していることが発覚。辛い、悪意のない過失であり、なことを理解して失礼、クラレのビニロン糸を使う

既存事業者の壁が高かったが、徐々に販路を広げ、売上げを伸ばしていった。

●64東京五輪が転機に
一方、本業の肌着はデパートへ販売していたが、大手肌着メーカーがシェアを伸ばし、先細り状態になってきた。時まさに東京オリンピック。スポーツウェアを追

仕の精神で依頼を受けることとした。

とはいえ、簡単なことでなかった。障がい者の受け入れて実績を持つ会社であつても、やはり社員からの拒否反応がないわけではなかった。受け入れた障がい者に1対1で向き合い、その子に合う仕事を見つけてあげた。

「はい」と笑顔で答えてくれた。苦勞が報われた瞬間であった。誰にも適した仕事があり、それに關わることで働く喜びを見つめることができる。仕事に人を

格外でも1着からでも対応し、学校に合わせてデザインして短期で納品する。大手企業では対応できない。小回りの良さを強みにしている。現在では、東北地方を中心に、約100校に商品を提供している。

●障がい者も向き合つて
仕事が増え始めた昭和43(1968)年、善六社長(当時)は職業を通じて社会に奉仕することを掲げるロータリークラブの会員になる。しかも同じ時期、養護学校の先生から就職先に困っている教員を雇ってほしいとの依頼を受ける。自分も戦争で右目に障害を持つ身。早速、率

合わせるのではなく、人に仕事を合わせることで、会社にとって必要な人材となる。こう確信したという。「一人を疎かにしない」。クラロンが今も大切にしている基本的な考えである。

「障がい者は、たとえ仕事を覚えるのは遅くても、いったん仕事を覚えると、集中力があることで、健常者よりも早くできるものになります」(須美子会長)。

昭和46(1971)年、他の企業にも呼びかけて障がい者の雇用機会を広げようと、福島市中学校職能開発研究協議会(職能研)の発足に、発起人として参加した。心身障がい者のため希望の懸け橋になろうとの思いであった。メンバーは彼らを引き受けてくれる企業を探すこともとより、職場実習、優良勤労者表彰などの広報活動を展開し、雇用機会拡大に向けた研究活動にも力を注いだ。現在も、職能研はその活動を続けている。

夫婦二人三脚でクラロンを成長させてきたが、平成14(2002)年、すい臓がんが発見された善六社長(当時)は、入院わずか3カ月でその生涯を閉じた。あまりのショックで何度も自殺を考えた須美子現会長を救ったのは、自閉症の傾向を持つ従業員であった。前社長は仕事に大きな声を出さず、突然大きな声を出していき、気が済むまで二人で大声を張り上げる。2年ほどは彼は大声を出さなくなった。また、仕事場で彼を見つめると抱き

合せて肩をトントンとたたき、気を落ち着かせた。須美子現会長を見つけた彼は、走って来て肩をたたいてと催促し大きな声で「社長さん、頑張つて」と言った。「障がいのある子を手助けしていると思つていた私は、実は彼らに助けられていたことに気づき涙が止まらなかつた」。須美子会長は亡き夫の志を引き継いで、会社を継ぐと決意した。

「障がい者と健常者を離して働くようにすることもできます。でも、私は一緒に分けて働いてほしい」と訴えている。しかも、障がい者が困っているときには、当たり前のように健常者が助けようになっている。障がい者が育つていくという。一人が人を育てる。同社のもう一つの基本的な考え方が実践されている。

現在、クラロンの従業員は121人。障がい者は36.3%を占めている。しかも、アパレル工場であったり、ダイバーシティ&インクルージョンが実現されている。(聞き手：神田良・明治学院大学経済学部名誉教授)



◆みんなが望む健康、みんなに優しいスポーツウェア◆

ご提案から納品まで、自社製造販売・一貫作業体制にて承っております

株式会社クラロンは、校風やイメージに合わせてデザインやカラーを組み合わせたスクールスポーツウェアを始め、各種イベント・クラスTシャツやチームユニフォームを取扱っております。

お気軽にお問合せくださいませ。



〒960-8164 福島県福島市八木田字並柳58
TEL. 024-546-0135 FAX.024-545-1345
<https://www.kuralon.co.jp/>